

5. 内水面増養殖試験

福井利憲・松本 勉・米村進司

I) ヤマトシジミ種苗生産試験

昨年度の種苗生産試験では十分な産卵数が確保できなかったため、適正な収容密度を求めることができなかった。本年度も適正な種苗生産密度を求めるため試験を行った。

材料と方法

種苗生産に用いた親貝は、平成6年7月14日に東郷池で東郷湖漁業協同組合員に採集していたヤマトシジミを、4時間冷蔵庫に入れた後、No.1 (0.5 t)、No.2 (0.5 t)、No.3 (1 t) 水槽に約30個づつ収容し産卵を待った。しかし、産卵がみられなかったため、親貝を7月19日に冷蔵庫に一晚入れ産卵誘発を行った。それでもNo.1とNo.2の水槽は産卵がみられなかったため、7月27日に再度前回と同様の方法で産卵誘発を行った。産出卵については、各水槽とも十分な産卵数が得られなかったため、そのまま飼育を継続した。飼育水は稚貝に変態後、珪藻等による飼育水の着色が殆ど見られなくなった時点で流水とした。水槽No.2にポンプで東郷池の水を毎分約2ℓで汲み上げ、水槽No.1、No.3にサイホンでそれぞれに給水した。

稚貝の計数は、0.2mmの網で泥と共に稚貝を濾過した後、一部を計り取り計数し、水槽全体の量を求めた。計数した稚貝は、東郷池に放流した。

結果と考察

台風のためNo.3の水槽が流出し、10月3日で試験を中止した。種苗生産結果を表1に、生産された稚貝の殻長組成を図1に示した。

収容密度については、十分な産卵数が得られなかったため検討できなかった。生残率は2つの水槽で大きく違いがみられたが、これは生残率の低かったNo.1の水槽が温泉の排水付近であったため、高水温が生残率に影響したものと思われる。

今後は十分な産卵数を確保するため、種苗生産の開始時期、親貝の収容方法等についても検討の必要がある。

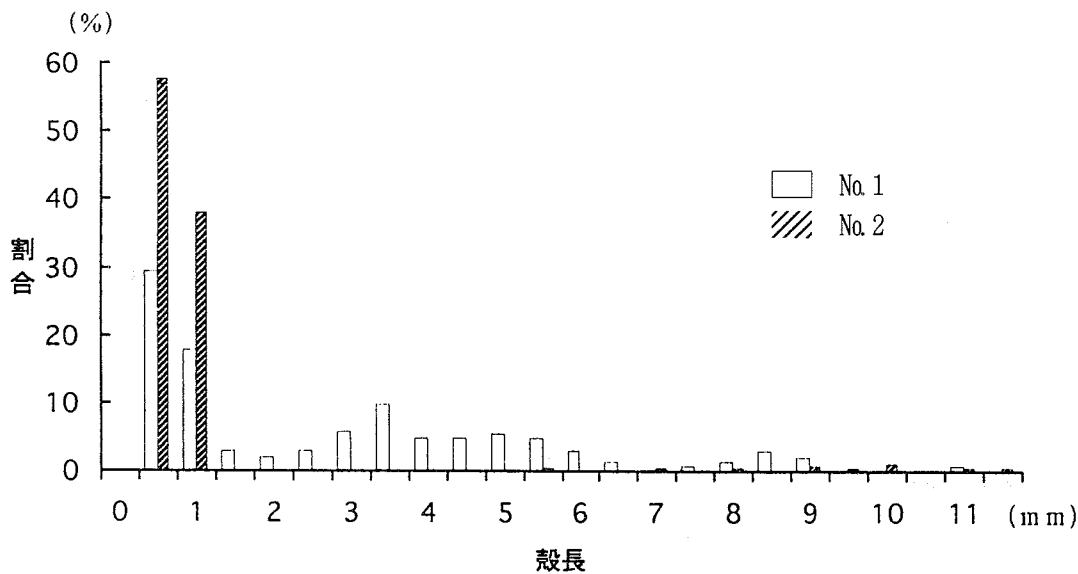


図1 種苗生産稚貝殻長組成

表1 平成6年度ヤマトシジミ種苗生産結果

水 槽 No.	1 (0.5 t)	2 (0.5 t)	3 (1 t)
卵 収 容 数	30 万	37 万	120 万
生 存 数	2.5	30	—
生 残 率 (%)	8	80	—
平 均 殻 長 (mm)	0.9	0.6	—
最 小 殻 長 (mm)	0.3	0.2	—
最 大 殻 長 (mm)	11.2	12.6	—
測 定 数	106	174	—

注：水槽No.3は台風のため流出

II) ヤマトシジミ採苗試験

この試験は、東郷湖漁業協同組合が主体で行い、水産試験場は採苗器の取り上げ時期について検討を行った。

材料と方法

1片が10mの4角形になるようにロープを張り、その内側に1m間隔でロープに採苗器を81個取り付けた。採苗器はタマネギ袋の中に古網を入れて作製した。採苗器の設置は7月23日に、計数を8月30日に行った。

計数は、0.2mmの網で稚貝を泥と共に集め、そのうち一部について行い、全体の量を推定した。

結果と考察

結果を表1に示した。採苗数は昨年に比べ10倍近く増加し、ほぼ一昨年並の採苗数となった。

表2 平成5年度ヤマトシジミ採苗結果

採苗器設置場所	小池	中央	温泉パイプ	野花
採苗数	40,000	140,000	66,000	50,000

Ⅲ) 湖沼環境調査

最近、東郷池、湖山池とも漁獲の減少と水質の悪化がみられている。このため、両池の環境を把握し、今後の対応を図るための基礎資料を得るため、本調査を行った。

材料と方法

試料の採取は昨年と同じ地点で行った。底層水についてはSK採水器を、底土についてはエクマン採泥器を用いて採集した。

DOはDOメーターで、CODはアルカリ性過マンガン酸カリウム分解法で、塩素量は硝酸銀滴定法で、硫化物量は検知管法で、強熱減量は900℃で3時間加熱し測定した。

結 果

分析結果を表1から表4に示した。

表1 平成6年度東郷池水質分析結果

St.No.	1				4				6			
	6.14	9. 1	12. 7	3. 6	6.14	9. 1	12. 7	3. 6	6.14	9. 1	12. 7	3. 6
表面水温	22.4	32.2	8.3	6.6	24.2	33.1	9.3	7.3	24.3	33.3	9.3	7.3
底層水温	23.9	31.4	8.3	6.4	24.2	32.5	8.9	6.4	24.6	28.6	10.0	6.7
表層DO	6.0	9.5	10.9	12.8	5.6	10.1	10.1	12.1	8.1	11.1	11.5	12.5
底層DO	3.6	1.3	10.8	13.0	5.6	7.3	11.3	12.8	5.6	0.0	5.0	11.0
表層塩素量(ppm)	1,900	4,600	2,300	270	3,000	4,300	2,200	250	3,100	4,600	2,300	210
底層塩素量(ppm)	3,000	4,700	2,300	590	3,000	4,300	2,200	480	3,200	5,100	2,900	620
底層COD(mg/ℓ)	2.3	4.4	2.5	1.0	7.6	4.9	2.2	1.8	2.7	3.8	3.8	1.7

表 2 平成 6 年度湖山池水質分析結果

St.No.	1				2				10			
	6.14	9.1	12.7	3.6	6.14	9.1	12.7	3.6	6.14	9.1	—	3.6
表面水温	23.8	31.2	9.1	7.7	23.6	30.8	9.2	7.6	23.7	31.8	—	7.2
底層水温	23.3	29.2	9.1	6.4	23.6	30.3	9.2	6.6	23.5	30.3	—	6.4
表層DO	8.5	12.7	12.3	13.3	7.7	14.5	12.2	13.3	9.6	13.6	—	13.3
底層DO	3.0	0.4	7.0	14.2	7.4	7.0	12.0	13.7	8.3	1.5	—	13.8
表層塩素量(ppm)	240	300	330	180	240	320	360	200	280	300	—	180
底層塩素量(ppm)	260	290	360	200	240	290	360	200	260	290	—	180
底層COD(mg/ℓ)	5.7	4.3	4.7	2.1	4.4	5.5	4.3	2.2	5.0	4.3	—	2.5

表 3 平成 6 年度東郷池底土分析結果

St.No.	1				4				6			
	6.14	9.1	12.7	3.6	6.14	9.1	12.7	3.6	6.14	9.1	12.7	3.6
水分(%)	34.7	34.6	27.7	37.1	27.4	24.2	29.0	36.1	72.6	76.1	76.4	78.2
COD(mg/g)	22.5	22.6	18.6	7.1	16.1	6.2	5.3	12.9	70.7	69.5	46.0	58.0
硫化物(ppm)	1,400	760	140	34	34	82	99	18	4,300	39,000	55,000	70,000
強熱減量(%)	3.8	4.4	2.8	4.1	2.5	1.8	3.6	3.1	14.1	16.5	46.0	15.7

表 4 平成 6 年度湖山池底土分析結果

St.No.	1				2				10			
	6.14	9.1	12.7	3.6	6.14	9.1	12.7	3.6	6.14	9.1	—	3.6
水分(%)	71.0	75.3	71.2	72.8	24.3	25.0	75.3	24.9	72.8	72.3	—	70.1
COD(mg/g)	96.2	60.5	65.0	35.9	0.9	2.6	94.4	1.2	75.3	38.4	—	29.5
硫化物(ppm)	1,900	2,800	3,200	5,600	110	720	1,400	140	1,400	4,000	—	2,200
強熱減量(%)	12.1	13.1	11.7	11.7	0.8	1.0	12.8	0.9	12.3	12.4	—	12.0

IV) アユ増殖試験

本県の内水面で最も水揚げ金額が多く、遊漁者の多いアユは、近年天然遡上量が減少している。本県でアユに関する調査は梶川らの報告がある程度で、資源等に関する十分な調査は行われていない。アユの天然資源の回復を目的として、本年はまず天然アユの現状把握のための調査を行った。

材料と方法

1) 遡上量調査

天神川の最下流の天神森堰堤（図1）を選定し、3カ所の魚道のうち右岸の魚道を遡上したアユを10分間計数した。左岸および中央の魚道については、それぞれの魚道の遡上量を5回計数し、右岸の魚道との遡上量の比率を求めた。その結果、遡上量の割合を右岸が1、左岸が0、中央が2と仮定し全体の遡上量を求めた。調査日間の遡上量は、最も近い調査日間の遡上量の差が均等に変動するものと仮定して全体の遡上量を求めた。

2) 生物調査

天神川に天神森・今津・若宮の3定点（図1）を選び、アユを定期的に採集し、全長・尾叉長・体重を測定した。若宮は琵琶湖産の放流アユが主体で、他の2点は天然遡上アユが主体である。

3) 産卵調査

大塚・今津・若宮の3定点（図1）を選び、アユを採集し生殖腺重量・熟度等を測定した。

生殖腺指数は生殖腺重量（g）÷全長（mm）³×10⁷で求めた。熟度については次の基準で雌で3段階、雄で2段階に分類した。

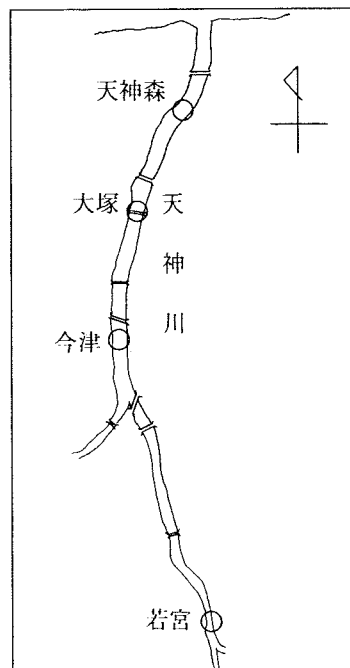


図1 調査地点位置

	I	II	III
雌	未熟卵	完熟卵で産卵していないもの	産卵後の卵
雄	未熟	成熟	

また、大塚で産着卵を採集し発生状況を調査した。採集した卵の発生段階は次の3段階に分類した。

	I	II	III
卵	眼胞形成以前	眼胞形成から眼色素定着前まで	眼色素定着以降

表1 平成5年天神川遡上アユ数

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	備考
	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	数(水温)	
3月30日	0(10.5)											ハマアトなし
4月5日	0(10.7)											
4月13日	0(11.3)											
4月15日							0(14.7)					アユ確認(前日遡上していたらしい)
4月20日	0(12.6)	0	0(13.2)	0(13.6)	0(13.3)	0(13.9)	0(13.9)					
4月26日	0(13.6)	0	0(15.4)	0(15.9)	0(16.7)	0(17.1)						アユ少ない
5月2日		0(16.7)	0(16.8)	0(16.8)	0(17.4)	0(17.7)	0(18.1)	22(18.6)	20(18.5)	10(18.7)		
5月9日	0(16.2)	0(17.1)	0(18.1)	0(19.1)	0(19.9)	0(20.4)	0(20.7)	2(20.7)	7(20.4)	0(19.8)		前日かなり遡上したらしい
5月16日	0(17.5)	0(17.9)	0(19.2)	0(20.1)	145()	79(21.8)	17(22.6)	14(22.4)	0(22.2)			堰堤下水位高いため魚道外から遡上
5月23日	0(20.1)	0(20.9)	0(22.1)	2(23.3)	7(23.9)	2(24.2)	1(24.1)	7(24.1)	4(23.6)	0(22.9)		
5月30日	0(18.7)	0(19.7)	0(20.1)	0(21.5)	0(22.6)	0(23.5)	1(23.8)	0(23.6)	0(23.0)			
6月6日		0(20.6)	0(21.5)	0(22.6)	0(23.6)	0(24.3)	0(24.8)	0(24.7)	0(24.5)	0(24.0)		
6月13日	0(21.2)	0(22.0)	0(23.5)	0(24.6)	0(24.5)	0(25.1)	0(24.6)	0(24.3)				

注：右岸側の魚値で10分間計数

4) 流下仔魚調査

調査は天神森堰堤で行った。稚魚ネットを用い1分間または2分間採集した。ネットに濾水形を取り付け濾水率を求めた。濾水率は流速計で補正した。流量は建設省倉吉工事事務所、小田観測所の資料を参考とした。流下仔魚の総数は、調査日間の流下仔魚量の変動が均等であると仮定し、総数を求めた。

5) 遡上アユの孵化日調査

天神森堰堤で採集したアユは水蔵または冷凍し、後日耳石 (sagitta) を採取した。耳石の日輪の計数はTUKAMOTOらを参考とし、孵化日を推定した。

結果と考察

1) 遡上量調査

遡上数の計数結果を表1に、推定遡上数を表2および図2に示した。遡上のピークは5月であった。遡上時間は12時から18時にかけて多く遡上した。平成6年度の天神川の総遡上数は64,000尾と推定された。

推定された総遡上数については、天神川漁協の組合長らによれば、この調査でアユの遡上が初めて確認された5月2日以前の4月中旬にすでに天神森堰堤を遡上しているアユが確認されていること、5月2日頃には上流の今津の堰堤でアユが確認されていること、天神森堰堤下の水位が高い時に遡上が多く、次の日には極端に遡上が少なくなることから、実際には推定数よりかなり多く遡上していたものと考えられる。本年度のアユの遡上量は、天神川漁協の組合長らによれば平年より多いとのことであった。

表2 平成6年度天神川アユ推定遡上数

	遡上数	推定遡上数
3月30日	0	0
4月5日	0	0
4月13日	0	0
4月15日	0	0
4月20日	0	0
4月26日	0	0
5月2日	52	936
5月9日	9	162
5月16日	255	7,650
5月23日	23	414
5月30日	1	18
6月6日	0	30
6月13日	0	0
合計	340	64,000

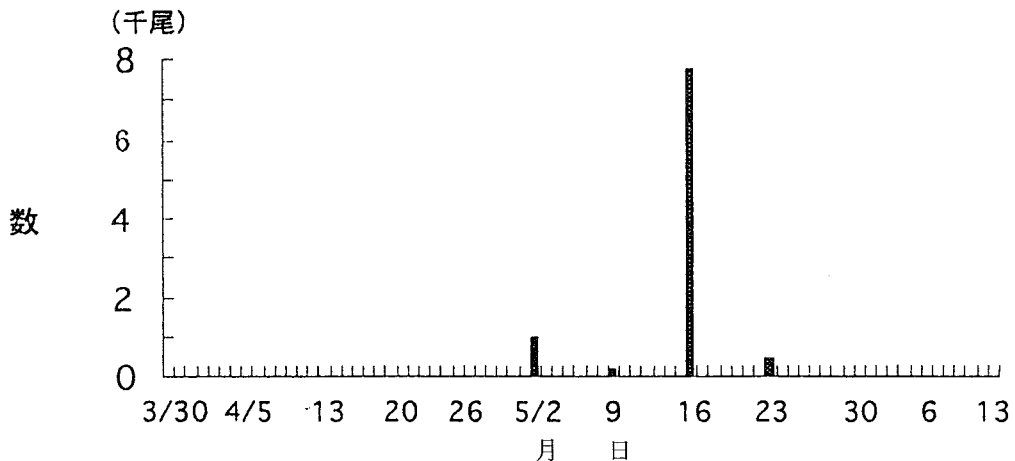


図2 平成6年度天神川アユ推定遡上数

表3 平成6年度天神川了工生物測定結果

月 日	今				津				天 神 森					
	全長 (mm)		尾差長 (mm)		体重 (g)		測定 数		生殖腺重量 (g)		平均 偏差		測定 数	
	平均	偏差	平均	偏差	平均	偏差	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
5月2日														
17日														
27日														
6月2日	137.4	25.0	123.7	22.3	22.2	12.9	21							
6日														
13日														
22日	185.8	9.5	171.8	7.1	58.7	10.7	5							
7月7日	170.8	13.7	154.6	13.1	43.1	13.3	5							
27日	155.9	23.6	140.1	21.5	32.1	13.5	42							
8月10日	145.7	15.1	130.9	14.1	27.4	8.6	27							
24日	159.2	14.8	143.0	13.4	33.4	10.7	23							
9月5日	164.3	13.4	148.1	12.1	37.6	10.3	24	0.5	0.1	0.8	0.3	5	13	161.4
26日	185.8	40.3	168.5	37.9	66.7	54.0	8	4.3	5.5	2.1	5.6	6.3	6.9	3
10月7日														
13日	175.2	16.1	159.5	14.6	45.4	14.0	6	4.1	3.9	0.7	3.8	6.7	8.0	4
19日	170.6	15.7	153.3	14.4	39.6	11.2	8	3.9	5.0	2.0	4.0	7.5	9.2	2
26日	185.9	15.4	165.3	13.5	42.6	9.7	7	1.9	3.6	-	2.7	4.4	5.2	1

月 日	若				宮				大				塚											
	全長 (mm)		尾差長 (mm)		體重 (g)		測定數		生殖腺重量 (g)		平均 偏差		尾差長 (mm)		體重 (g)		測定數		平均 偏差		生殖腺重量 (g)			
	平均	偏差	平均	偏差	平均	偏差	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
6月2日	128.5	17.0	116.6	17.1	19.1	7.4	13																	
22日	144.9	14.0	132.4	13.0	26.7	7.9	11																	
7月7日	146.7	22.4	132.9	21.4	29.0	12.1	14																	
27日	154.9	16.7	139.8	15.1	33.0	10.0	14																	
8月10日	167.4	18.9	152.0	16.7	42.3	13.5	22																	
24日	180.5	10.8	163.6	9.9	53.4	10.4	25	0.5	0.4	0.3	0.2	0.8	0.7	12	12									
9月5日	178.8	9.2	160.5	10.2	51.5	9.2	24	3.2	3.0	0.7	1.1	5.3	5.4	11	13									
10月7日																								
13日																								
19日																								
26日																								
11月1日																								

2) 生物調査

生物測定結果を表3に、全長組成の推移を図3から図5に示した。最下流の天神森は、5月から6月にかけて成長が全くみられないが、7月以降は成長がみられる。6月中は遡上魚の加入があったため、成長がみられなかったものと思われる。今津は6月の下旬以降成長が全くみられない。本年は渇水であったため、漁獲圧力が高かったことにより、成長がみられなかったものと思われる。若宮は6月から8月下旬まで成長がみられる。若宮は渇水の中でもアユが順調に成長していることから好漁場であると思われる。

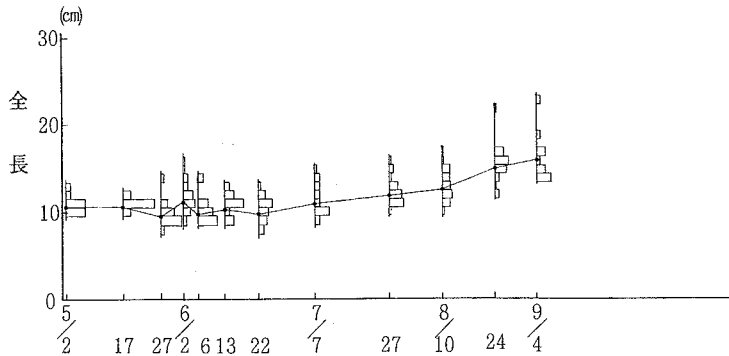


図3 天神森におけるアユ漁獲日と全長組成

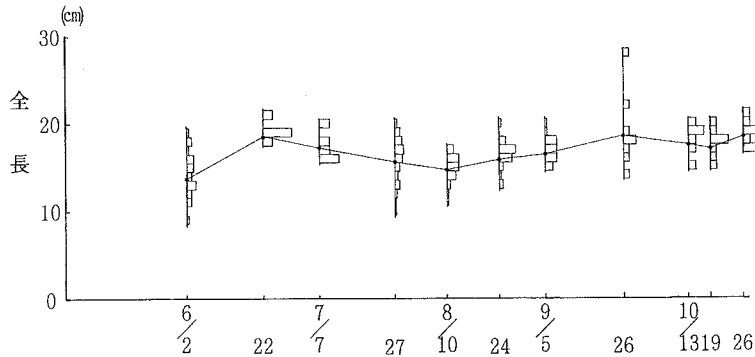


図4 今津におけるアユ漁獲日と全長組成

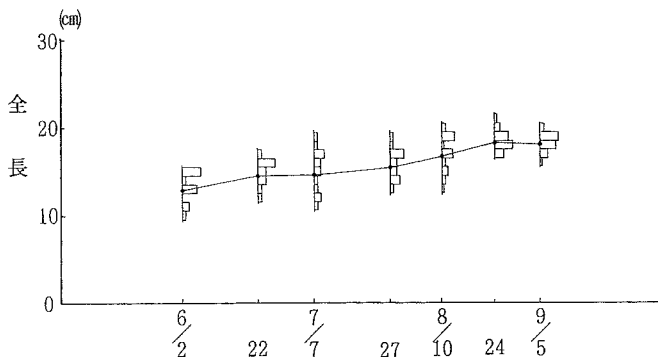


図5 若宮におけるアユ漁獲日と全長組成

3) 産卵調査

生殖腺指数の推移を図6から図8に示した。琵琶湖産アユである若宮は9月上旬から生殖腺指数の増加がみられるが、天然遡上アユである今津は9月下旬より指数が増加し、10月20日頃にピークが見られる。今津・大塚とも10月下旬に指数が減少している。

成熟状況の推移を図9から図12に示した。今津では雄が10月13日に、雌が19日に成熟魚が初めて採取された。大塚では雄が10月7日に、雌が13日に成熟魚が初めて採取された。10月26日には雄は全て成熟していたが、雌は11月1日でもまだ未産卵の個体が採取された。

性比の推移を図13に示した。湖産アユである若宮の性比はほぼ50%であった。海産アユは、上流の今津の性比が50%を越えているが、下流の大塚は常に50%以下であった。

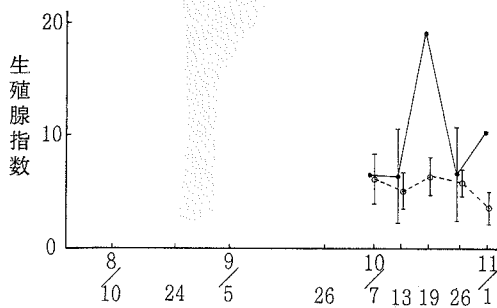


図6 大塚における生殖腺指数の推移

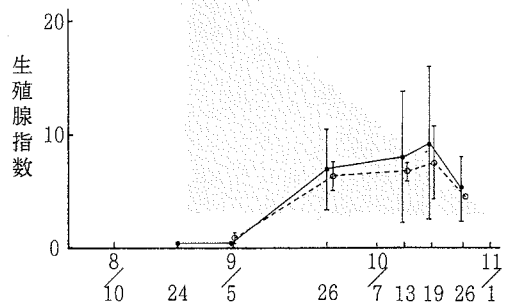


図7 今津における生殖腺指数の推移

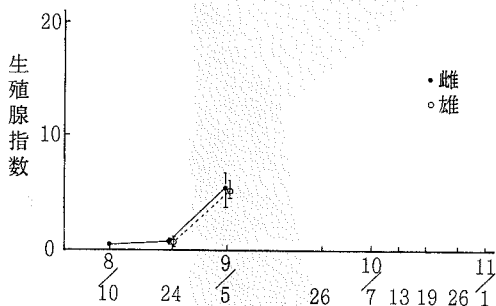


図8 若宮における生殖腺指数の推移

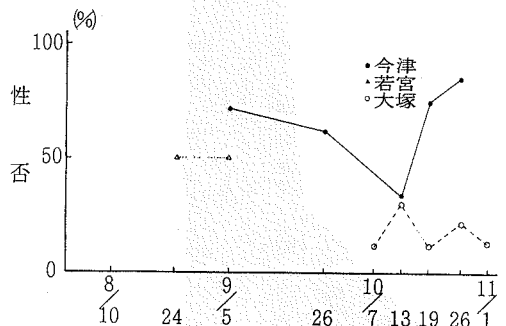


図13 性比の推移

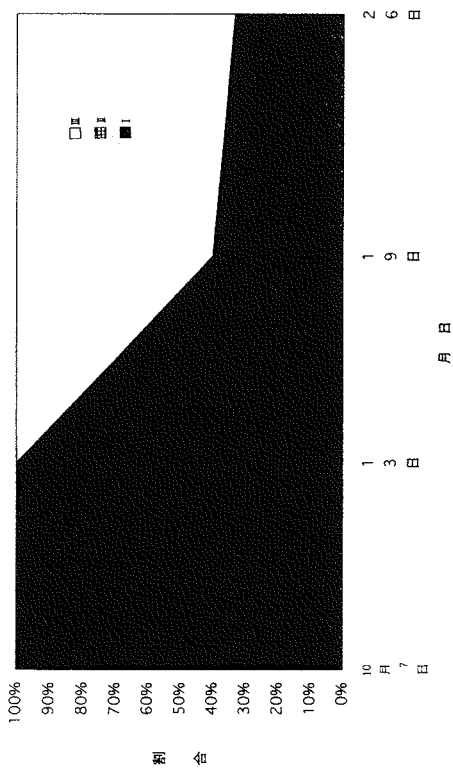


图9 今津 (雌) 成熟状况

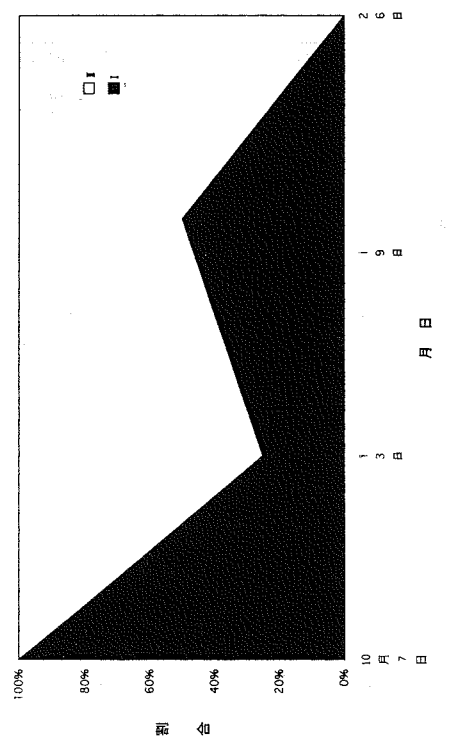


图10 今津 (雄) 成熟状况

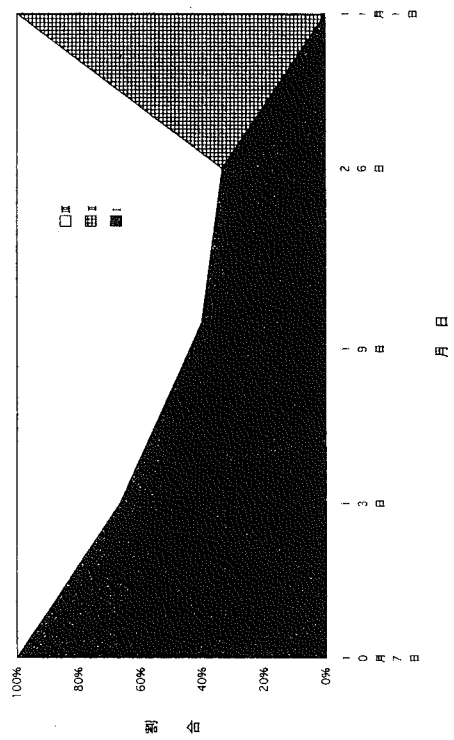


图11 大塚 (雌) 成熟状况

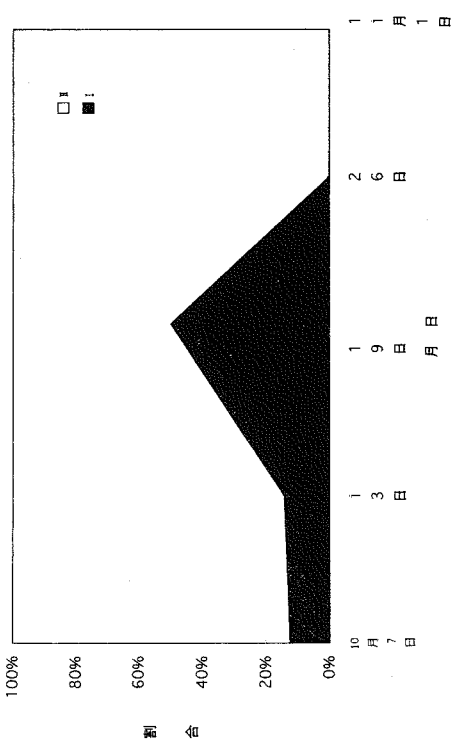


图12 大塚 (雄) 成熟状况

大塚で採集した産着卵の成熟状況を図14に示した。調査を始めた10月12日にはすでに発眼卵がみられ、12月12日以降は全て発眼卵のみが採集された。アユの産卵期は、生殖腺指数・成熟状況から判断すると、10月が最盛期であると推定された。また、産着卵の発生状況からすると11月下旬または12月上旬まで産卵が行われていたものと推定される。

産卵期になると、雄が雌に比べ早期に成熟し、下流に下る時期も早いものと推定された。

本年は夏場の渇水の影響で産卵期が平年より遅れていたとの指摘がある。今後とも調査を継続する必要がある。

4) 流下仔魚調査

調査結果を表4に、推定流下量を表5および図15に示した。流下仔魚は調査を始めた10月20日にすでに採集され、12月末まで採集された。流下仔魚数は11月9日に大きなピークがみられ、12月6日にも若干のピークがみられた。総流下仔魚数は2,700万尾と推定された。

5) 遡上アユの孵化日調査

天神森で採集したアユの耳石から推定した孵化日を図6に示した。孵化日は10月20日から翌年の1月上旬と推定された。孵化のピークは11月下旬から12月上旬と推定された。

他県の孵化日と比較すると天神川は孵化日が遅くなっているが、本年の流下仔魚の出現時期と比較すると、ピークは半月ほど後半にずれているものの、推定孵化日は下流仔魚が採集された時期とほぼ一致している。

兵藤らの報告によれば、遡上稚アユは、その産卵孵化日が早い個体ほど、体長が大きい個体ほど、成長率が高い個体ほど早い時期に遡上する傾向がみられるとしている。これを確認するため、遡上アユ漁獲日と全長組成の関係を図17に、遡上アユ漁獲日と日令組成を図18に、遡上アユ漁獲日と推定孵化日を図19に示した。遡上期の前半のサンプリングができなかった問題点があるものの、兵藤らの報告は確認できなかった。遡上アユの全長組成は時期が進んでも殆ど変化がみられない。遡上アユの漁獲日が遅くなるほど日令も遅くなる傾向にあった。

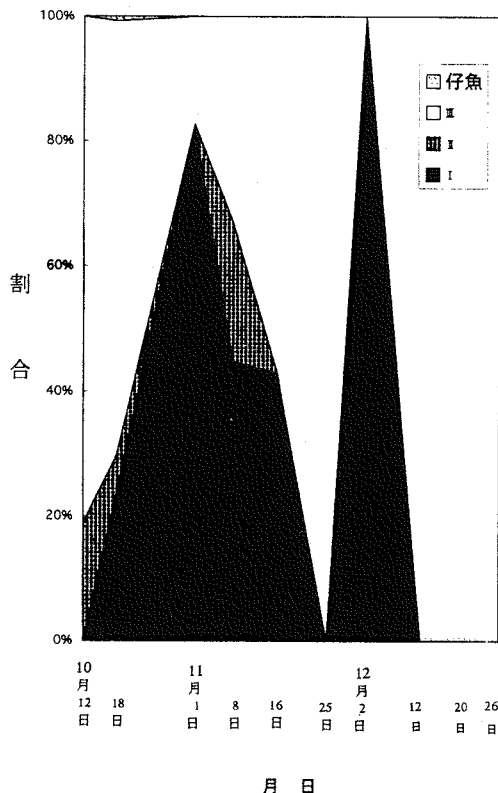


図14 卵発生状況

表4 平成6年度天神川アユ流下仔魚計測数

	流量 (t/s)	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	24:00
		数(濾水)	数(濾水)	数(濾水)	数(濾水)	数(濾水)	数(濾水)	数(濾水)	数(濾水)
10月20日	8.22	0(400)	0(204)	0(264)	0(36)	1(185)	1.5(167)	0(195)	
10月27日	6.75	0(150)	0(50)	0(67)	0(53)	0(90)	0(53)		
11月2日	7.08		0(75)	12(135)	19(200)	18(200)	13(150)	17(120)	1(120)
11月9日	5.60		0(135)	18(135)	34(175)	58(125)	43(190)	12(150)	
11月16日	5.95	0(150)	0(180)	4(140)	6(160)	2(100)	6(150)	4(100)	
11月24日	11.54		3(135)	2(130)	1(140)	0(165)			
12月6日	5.56	0(120)	9(55)	11(95)	9(85)	3(88)			
12月12日	5.80	0(130)	0(90)	3(110)	4(50)	0(110)			
12月26日	11.32	0(42)	0(135)	0(225)	1(205)				
1月9日		0(295)	0(190)	0(70)	0(250)				

流下仔魚数は1分間当りの仔魚数、流量は建設省の資料。

濾水は濾水計のカウント数。濾水計の流速 (m/s) = 0.257 + 濾水計カウント数 × 0.0010869 とした。

表5 平成6年度天神川アユ流下仔魚計測数

	総数	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	24:00
10月20日	15,500	0	0	0	0	100	160	0	
10月27日	0	0	0	0	0	0	0		
11月2日	520,100		0	1,230	2,260	2,420	1,890	2,470	150
11月9日	2,084,400		0	3,980	6,780	13,160	8,270	2,550	
11月16日	309,200	0	0	930	1,320	520	1,350	1,040	
11月24日	164,233		1,870	920	450	0			
12月6日	495,100	0	2,520	2,700	2,280	750			
12月12日	115,300	0	0	740	1,100	0			
12月26日	22,500	0	0	0	380				
1月9日	0	0	0	0	0				
総数	27,919,000								

1分間当りの推定数。総数は1日当りに換算。

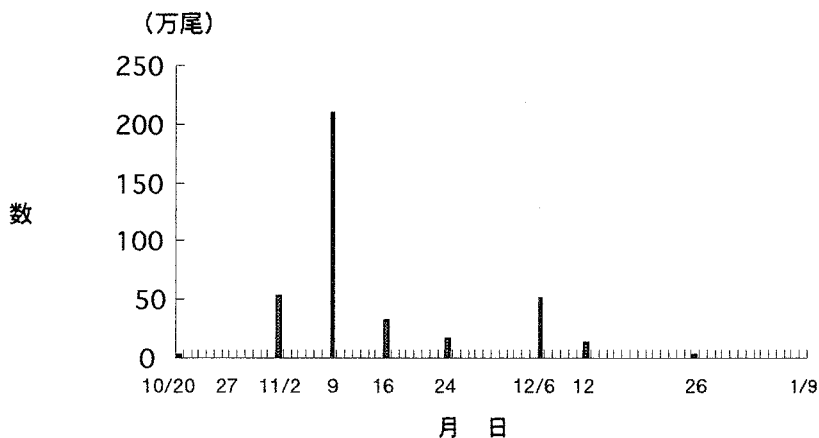


図15 平成6年度推定アユ流下仔魚数

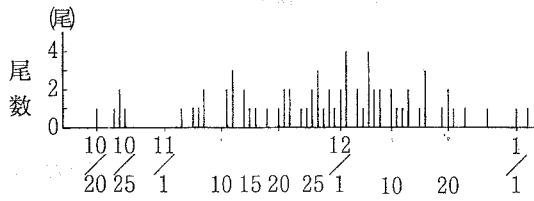


図16 遡上アユの推定孵化日と尾数

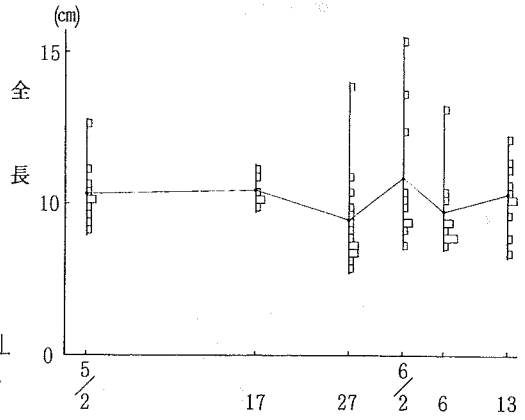


図17 遡上アユ漁獲日と全長組成

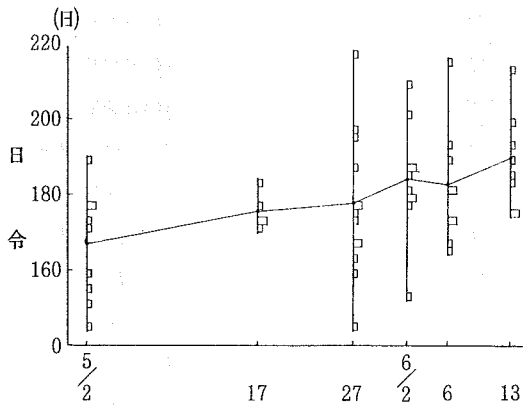


図18 遡上アユ漁獲日と日令組成

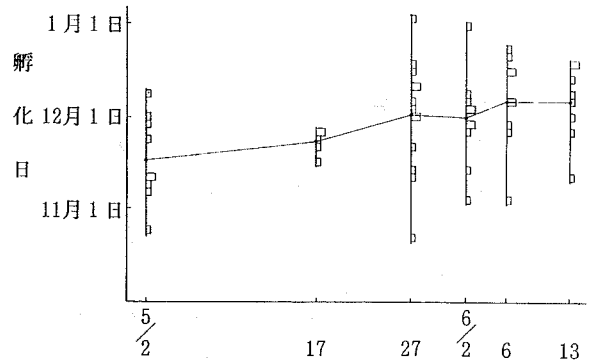


図19 遡上アユ漁獲日と推定孵化日

参考文献

- 1) Katumi Tsukamoto・Takeshi Kajihara (1987) : Age Determination of Ayu with Otolith. Nippon Suisan Gakkaishi53 (11). 1986-1997.
- 2) 西村和紀・横松芳治 (1992) : 大野川, 大分川および番匠川のアユの遡上と産卵状況. 平成4年度大分県内水面漁業試験場事業報告. 27-39.
- 3) 兵藤則行・小池利通・星野正邦・鈴木惇悦 (1988) : 海産稚アユに関する研究-V・, 遡上稚アユの日令とその孵化日について (2). 新潟県内水面水産試験場調査研究報告. 14. 1-5.
- 4) 塚本勝巳・望月賢二・大竹二雄・山崎幸夫 (1988) : 川口水域におけるアユ仔稚魚の分布・回遊・成長. 水産土木25 (2). 47-57.

6. 魚病対策試験

福井利憲

目 的

養殖魚の疾病の早期発見，早期治療及び疾病の発生を防止することにより，養殖漁家の経営の安定化を図ることを目的とする。そのため，養殖魚の巡回健康診断，魚病の発生状況の把握，魚病対策に関する知見を収集すること等に努め，魚病対策に必要な知見を養殖漁家等に知らせる。また，消費者保護のため，水産用医薬品を適正に使用するよう指導すると共に水産用医薬品の残留検査を行う。

結 果

養殖場の巡回指導及び魚病診断依頼による現場での指導等の状況を表1に，場内への持込み魚及び現場での病魚の魚病診断状況を表2に示した。

本年は，県内で初めて冷水病の発生が確認された。県内で冷水病の発生した養殖漁家が2経営体あり，それぞれ別のルートで感染したものと考えられた。近年，被害の拡大傾向にあったせう病は被害が減少した。BKDの発生が平成4年以来2年ぶりに確認された。

コイはねむり病，浮腫症などの発生があった。

医薬品残留検査は，簡易法で塩酸オキソテトラサイクリンをアマゴ・ハマチについて行ったが残留は認められなかった。

表1 養殖場巡回指導等状況 平成6年度

月 場 所	魚 種	件 数	内 容
平成6年			
4月岩美町	アカガレイ	1	魚病診断依頼
郡家町	ヤマメ	1	巡回指導
境港市	ヒラメ	1	魚病診断依頼
中山町	ブラウン	1	巡回指導
溝口町	ニジマス	1	巡回指導
関金町	ヤマメ	1	巡回指導
6月郡家町	ヤマメ	1	魚病診断依頼
智頭町	アマゴ	1	魚病診断依頼
智頭町	アマゴ	1	巡回指導
7月中山町	ブラウン	1	魚病診断依頼
関金町	ヤマメ	1	巡回指導
鹿野町	ヤマメ	1	巡回指導
9月米子市	コイ	1	巡回指導
12月郡家町	ヤマメ	1	巡回指導
平成7年			
1月智頭町	アマゴ	1	巡回指導
境港市	ハマチ	1	巡回指導
鹿野町	アマゴ	1	巡回指導
青谷町	ニジマス	1	巡回指導
河原町	イワナ	1	巡回指導
佐治村	ニジマス	1	巡回指導
溝口町	ニジマス	1	巡回指導
2月三朝町	ニジマス	3	巡回指導
関金町	ヤマメ	1	巡回指導

表2 平成6年度魚病診断状況

病名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
筋萎縮症								アワビ			ニジマス	
I H	アマゴ			ブラウン								ヤマメ
せう病			アマゴ2	ブラウン								ヤマメ
冷水病	アマゴ		アマゴ									ヤマメ
鰓病			アマゴ									
連鎖球菌症							ハマチ					
B K												ヤマメ
トリコデイナー症	ヒラメ3											
白点病								ヒラメ				
イクチオファスス症			ヒラメ								ニジマス	
ガス病												コイ
不明	アカガレイ	ヒラメ	アマゴ, カジカ	バイ	オコゼ	コイ, クルマエビ	ハマチ					

表3 平成6年度薬剤感受性試験結果

薬 剤 名	菌種	Aeromonas Salmonicida			Streptococcus	Enterobacteria
	月日	6.20	6.23	7.11	10.6	10.21
	魚種	アマゴ	アマゴ	ブラウン	ハマチ	ヒラメ
スルファジメトキシム		0	0			
ニフルチレン酸ナトリウム		1	0	3	3	3
オキシリン酸		0	3	3	3	1
塩酸ドキシサイクリン		3	3	3	3	2
塩酸テトラサイクリン		3	3	3	3	2
塩酸オキシテトラサイクリン		3	3	3	3	1
アモキシシリン		3	3	3	3	2
エリスロマイシン		2	2	3	3	0
ジョサマイシン		1	0	0	3	0
塩酸リンコマイシン		0	0	0	0	0
ノボビオシンナトリウム		2	1	1	2	3
ナリジクス酸		1	3	1	0	3

表中の数値は薬剤の感受性を示す 0：－， 1：＋， 2：≡， 3：≡≡